

Title	混淆する東アジア思想 花郎・王陽明・ハビアンを中心 に( Digest_要約 )
Author(s)	李, 静
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2019-07-23
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/doctor.k22019">https://doi.org/10.14989/doctor.k22019</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

# 混淆する東アジア思想

一花郎・王陽明・ハビアンを中心に

李 静

## 要 約

東アジアの思想空間への視座は多様であるが、他者との関係性に対する分析は一貫して重要な論点となってきた。本論文では「他者との出会い」という視点から中・日・韓の思想史を再検討する。歴史上変化しながら形成されてきた東アジアの思想空間に関して、新たな視野の可能性を提示する試みをする。

筆者は序章において、「三教交渉帰○（○に儒・仏・道などが入る）」というパターンを打ち出して、中・日・韓における三教交渉の系譜に数えられる人物の思想的特徴を分析した。筆者の考えでは、それぞれの思想家は諸々の思想から影響を受けて、思想の多様性を持つが、その中で、特に優位性を持つ思想が存在する。その優位性がある思想に焦点を合わせて、それぞれの思想家は「儒学者」とか「神道家」とか「僧侶」などと位置付けられる。だが諸思想が交渉した後に、いかに特定の思想が優位性を持つようになるか、ということが筆者の主要な関心事である。

筆者の考えでは、「三教交渉帰○」の「帰」という一字に非常に複雑な意味が含まれている。「帰」は「時間性」と「空間性」を兼ねている。その時間性についていうなら、ある思想家の思想は生涯にわたり、種々の要因によって継続して変化していると考えられる。だが注目すべきは、「晩年定論」を過度に重要視して、思想家の晩年の思想こそ当該思想家が集大成したものと見做し、その思想的特徴を代表すると主張する研究者が少なくないことである。しかしこの考えには、思想家の思想変化を正確に把握できない危険性が内包される。ある思想家を分析する際に、晩年の思想が思想家の全体像においてどれほどの重要性を占めているのか、という問題を綿密に検討することが必要不可欠な作業であろう。

「帰」の一字が持つ「空間性」とは、思想家の思想に重層性が存在することである。中国においてはふつう、「三教一致」「三教合一」の用語で思想の混淆様相を表している。だが筆者は、このような用語が三教融合の側面にだけ注目し、そこにのみ重点を置いていると指摘したい。実は三教の相互関係は極めて複雑で、闘争と融合、受容と変容など、諸思想のダイナミックな交渉関係を構築していた。諸思想家を研究する際に、思想家の言行と立場が当時の社会背景との緊密な関係を持つことを看過することはできない。特に仏教側と道教側は、三教一致論を自己の勢力を広める方法として利用しようとするものが多かった。したがって、いわゆる「三教一致論」「三教合一論」は「うわべ」の論理にすぎないともいえる。具体的に、ある思想家が三教に対してどんな態度を取ったのか、彼は生涯にわたり、思想的にどのような変化を経験したのか。そして根本的には、彼の思想はどこに帰結したのか。これらを深く掘り下げなければ特定の思想家の実像を捉えることは極めて困難だと筆者は考える。

第一章と第二章において筆者は、仏教の東アジア伝来という重大な出来事を手掛かりとして、「他者」たる仏教と遭遇した際の、嵇康（中国）、聖徳太子（日本）、花郎（韓国）における諸思想の交渉様相を考察した。無論、三者が生きた時代に隔たりがあることは看過できない。しかし、嵇康、聖徳太子、花郎の三者はたとえ生活する地域と時代が異なっても、すべて仏教が最初に自国に流入した時代に生きたことには相違がない。したがって、「他者」たる仏教と遭遇した際の、三者における諸思想の交渉は比較研究に値する

課題となる。その類似点と相違点を綿密に分析すれば、仏教伝来の最初の段階において東アジアの思想空間がいかなる再構成を果たしたのか、という課題に関して、今まで留意されなかった発見が期待できる。つまりこの比較分析は、三国相互の文化特質および歴史的関連を発見することに役立つのである。嵯康、聖徳太子、花郎の三者は「三教交渉」という共通の構造に支えられたが、思想的な差異も明白に存在していた。特に、花郎と聖徳太子は共に当時先進的だと見做された大陸の宗教・思想を受容したが、その後著しく異なる発展を遂げ、独自の性格と形態を示した。

仏教への対応に関しては、聖徳太子は嵯康と極めて対照的な態度を取っていた。嵯康の目から見れば、仏教は夷狄の教えであるだけでなく、不忠不孝の教えでもあったと推測される。その反面、聖徳太子は仏教思想と儒教思想を共に受容する政策を実行したが、実際には明確な偏重があり、儒家の「民衆教化」の役割より仏教がより普遍的な価値を持っていると彼は考えた。すなわち聖徳太子の選択は「世間虚仮、唯仏是真」に重点を置くものとなった。嵯康と聖徳太子の思想特徴に現れた相違は、儒家の世界観と仏教の世界観の相違に帰すると考えられる。さらに、その背後には華夷意識も潜んでいるであろう。

一方、花郎は新羅特有の土着習俗に根ざしながら、同時に先進的な文化・思想とされた儒・仏・道と結びついて独立の発展を遂げた。花郎は弥勒信仰にも深く影響され、寺院や僧侶と密接な関係を持った。花郎においては土着のシャーマニズムに儒・仏・道が加わり、それらが絶妙に習合・混淆して、独特な風流道思想を醸し出した。だが、三国制覇の時代に生まれた花郎の思想は強烈な国家意識に裏付けられており、「三教合一帰儒」の立場に立ったと筆者は主張する。

第三章以降において筆者は、朱子学の東アジアにおける影響力に注意を向けた。筆者は朱子学の登場を仏教の伝来と同様きわめて重要な出来事だと認識しており、朱子学の普及が東アジア思想空間の再構成へ重大な影響を与えた点について検討を進めた。第三章、第四章、第五章は朱子学の影響及び朱子学の影響を受けた群像についての検討である。

第三章において筆者はまず、主に朱子学の東アジアにおける影響力を分析した。筆者は先行研究と同様に、東アジア三国における朱子学者の系譜に強く関心を抱くが、これに関しては膨大な先行研究が存在している故、研究対象の選択に工夫を凝らした。筆者の見解によれば、朱子学の影響を受けた人々は三種類、すなわち、朱子学の信奉者、朱子学への反逆者及び無意識の朱子学者に分けることができる。これを踏まえて、筆者は中・日・韓から適切な事例を見つけ出し、具体的な分析を進めた。当初、筆者は東アジア思想史を大観すれば、朱子学の登場以後、ほとんどの思想家が上記の分類に当てはまると考えたが、実際に朱子学の系譜と反朱子学の系譜を整理してみると、諸思想家の思想に重層性が存在し、一概に朱子学者や反朱子学者などと明確に系譜を分けられない思想家も数多く存在することに気付く。これを解決する手段として、筆者はある思想家を検討する際に、朱子学の龐大な思想体系における特定の側面に限定して、それと照合しながら、各思想家と朱子との関係を検討してみることにした。その作業により、筆者は先行研究の不足部分を補うことができ、定説とされる朱子学の系譜に修正を加えた。さらに筆者は「不相離・不相雑」の理気関係に着目し、朱子学の「隔て」理論を綿密に分析した。最後に、筆者は朝鮮性理学の正統と自任する宋時烈及びその門下生を取り上げ、朱子学の「隔て」理論を援用しながら、明清交替の際、朝鮮王朝が清朝という巨大な他者と対応する時、各人物の行動に表出した思想構造を分析する試みをした。筆者は宋時烈の北伐大義論、韓元震の人物性異論及び朝鮮王朝末期の衛正斥邪論は一脈通じる思想であると認識し、関係人物が朱子学の「隔て」理論に忠実であったと論証した。

第四章において筆者は、陽明学を分析対象として検討を進めた。筆者は先行研究と異な

り、考察の重点を、朱子学の「隔て」論理への反発としての陽明学の「万物一体」論理に置いた。筆者は、王陽明の「万物一体の仁」思想及びその具現である王心斎の「鯁鱗説」が世直しの機能を備えることに高い評価を与える。陽明学者はこのように情熱を持ちながら、教育を普及することに全精力を注ぎ、雄大なる救世運動を引き起こした。

興味深いのは、陽明学の救世運動は朝鮮王朝末期の東学農民運動と共通する点があることである。そのため、筆者は「水平の思想」及び「世直し運動」に注目して、王陽明の「万物一体の仁」と崔時亨（東学）の「人すなわち天」思想の比較を行った。朱子学は超越的な「天」を重んじ、天と人との関係を垂直の軸によって厳しく規定した。その枠組みのなかでどのように「水平」の軸を打ち出していくかということが朱子学以後の東アジア思想の重要な課題となった。それに敢然と取り組んだのが陽明学や東学だったと考えられる。両者は同様に朱子学の延長線に立ちながら、朱子学を止揚する思想であった。

第五章において筆者は、「無意識の朱子学者」としての不干斎ハビアンを分析対象とした。日本に伝来したキリスト教という他者に出会うことによって、自分が生まれ育った文化を再解釈した知識人は、中世から近世への転換期及び近世から近代への転換期には多く存在していた。その中の嚆矢として不干斎ハビアンは注目に値する。彼は伝統思想を完全に否定したように見えるが、実はハビアンの考えの奥底に潜んでいるのは「朱子学的思惟」ではなかったか、というのが筆者の分析である。筆者は、不干斎ハビアンの身分転換に注目し、彼の心の遍歴が「朱子学に精進する禅僧→第一回の改宗、キリスト教に入信→第二回の改宗、キリスト教を棄て、朱子学を代表とする儒道への帰還」であったと分析している。

ハビアンはキリスト教教義を代表とする新しい思想と遭遇する際に、最初に朱子学の「主知主義」に基づき、孜孜として新しい「理」を追い求めた。新しい「理」と陳腐化した「理」は絶えず戦いを繰り返した。最後に、不干斎ハビアンは二次転向を経て、朱子学を代表とする儒道に復帰した後、「華夷の別」を唱えて、逆にキリスト教を猛烈に批判するようになる。無論、当時の禅僧たちも「華夷の別」を以て、キリスト教の普及を排斥した。それゆえ、単に「華夷の別」に着眼するだけでは、ハビアンの思想が朱子学の「隔て」理論に影響された性と急に断言することはできないが、二次転向をした後の不干斎ハビアンがキリスト教や西洋文化などの「他者」と対峙する時、その思想と行動に朱子学の「隔て」理論と通底する部分があると察知できる。

筆者は終章において、花郎、王陽明、不干斎ハビアンの比較分析をした。筆者は研究対象を選別する際に、東アジアにおける思想混淆の様相を呈していることを取捨の基準として設定した。三者はこの点においては、明確に類似性を持ち、通底する部分も多く有している。程度の差はあるが、三者が同様に儒教と仏教の影響を受けたことは周知のことである。確かに三者における諸思想の交渉は明確に看取されるが、筆者は具体的な分析を行った後、一つの結論に辿り着いた。すなわち、三者は様々な思想を取り入れて、独自の思想構造を形成した。だがその思想の深層においては儒教の影響がもっとも強いのではないか、というのが筆者の見解である。

筆者は三者が儒教から多大な影響を受けたことに共通点を持っていると主張する一方、三者の間で看過できない大きな差異が存在することも認める。たとえば、花郎と王陽明は君主の側近でありながら、王と民衆の間に立った中間人でもある。したがって、両者はともに道德倫理や政治理念を重視し、儒教が望む「聖人観」を持っていた。彼らは当為と存在とを合致させる努力を怠らず、人格の完成を追求することを人生の理想として求めた。その反面、ハビアンは終始一貫して孤高の知識人の誇りを保ち、聖人を目指す信念は全くなかった。しかし、もっとも重要なのは、花郎・王陽明・不干斎ハビアン三者が自由な意

志を以て、「自然」な生き方を貫いたことであろう。自己本来のありかたに気付いた彼らの「自然精神」や「自由意志」は天地に満ちている。その背後に、東洋の靈性や東洋的生命思想が一貫して流れているのではないかというのが筆者の推測である。したがって、「自然精神」を手掛かりとし、西洋思想と比較しながら、東洋的思想の特質を一層深く探求することを今後の課題にしたい。

周知のごとく、諸思想家に於ける三教交渉の様相は極めて複雑で、思想家の思想形成に影響を与える要素は多様である。多少の差があるが、時代背景、交友関係、出版物などいずれもが思想家に影響をもたらす。これらすべてを検討するという広範な作業は筆者の力を超えるものである。それゆえ、序章では二次資料の引用が多く、すでに定説となっている論説の確認部分が少なくない。だが、「三教交渉帰〇」のパターンを以て分析するという方法論は斬新なものであると筆者は考える。この新鮮な方法論によって、三国における思想を比較することを通して、東アジアの混淆する思想空間をより明確にしていきたい。

筆者は本論文において考察の範囲を前近代の中・日・韓三国に限定したが、序章の冒頭でも述べたように、仏教の伝来と朱子学の隆盛が東アジア思想空間の混淆様相の形成に絶大な影響を与えた最も大きな出来事であるというのがその理由である。歴史上、ベトナム、琉球とチベットなどの地域も例外なくその影響を受けた。その結果、程度の差が多少存在するが、それらの地域にも思想の混淆様相が同様に現れた。だが現在、諸事情により、諸思想の交渉に重点を置いて研究をする学者はさして多くない。今後より多くの研究者が思想の混淆状態に着目して、さらに広い範囲から東アジア思想空間の混淆様相を考察することを期待したい。